

近代短歌の表現としての「手」に関する問題

—その一般的用法と啄木の特異性—

朱 衛紅（中国上海财经大学准教授）

一、研究の目標とその考察方法……「ぢつと手を見る」とは？

石川啄木のよく知られた短歌の一つに以下の歌がある。

はたらけど／はたらけど猶わが生活（くらし）楽にならざり／ぢつと手を見る

この歌はかつて生活短歌の典型と評価されたこともあった。最近では気どって不自然という評価もある¹。「はたらけど」を繰り返しながらの四句までのリアリティは希薄である。ただ、結句の「ぢつと手を見る」という表現には単純な抗議や嘆きを超えた深い吸引力が感じられる。しかも、啄木の短歌には身体の部位語「手」を歌の用語として使った例が他にも多くあり、このような表現はこの歌の良し悪し以上に啄木短歌の本質に関連する問題ではないか。その解明を試みたのが本論である。

「ぢつと手を見る」のキーワードはもちろん身体部位語の「手」である。身体はすべての人間活動（行動や思考）の基盤だから、身体語は日常的に様々な熟語や慣用句を作り出す。「手」を使った言い方でも、「相手」「手ごろ」「上手下手（じょうずへた）」「手順」など、数え上げてゆくと八百ほど²もあって、それに次いで多い「足」や「目」の数倍はある。人間がそのものに対してどう考えて来たかをタイムカプセルのように内包しているのが言葉である。香原志勢³が「手足」の現象的な意味について以下のように述べている。

手足という語があるが、第一義的には、手と足、すなわち四肢を意味する。転じて、部下、道具として用いられるが、同時にそれは「頼りになるもの」として扱われる。大切なことは、同じ人体の一部でありながら、手足は常に従属的な位置に甘んじているということで、そこには主体性が見られない。体の重要部分の扱いは受けるが、同時に手先、手下の意味を持つ。つまり手足は人間の本体ではないかもしれないが、現象的にはきわめて人間的なもの。

人間が一般論として手をどのように考えて来たかは、確かに以上のものであろうし、手を人という意味に転用するのは、後述するメトニミー表現の問題でもある。身体はあって当然という前提であるために、かえって本格的な思考の対象にはなりにくい。まして日常語の対極といってもよい詩歌の表現では、身体語が使われる例は古典和歌ではほとんどなかった(女性性を表す「黒髪」は例外)。現実的具体的な世界を詠うのが近代短歌の特徴とされるが、歌語として「手」が使われる例はやはりそう多くない。「ぢつと手を見る」というのは、日常を超えて手を意識させる何かを感じたからであろう。

考察方法としては、第一に、参考文献1~4⁴を基礎資料にして、啄木を除く近代短歌の主要な歌人たちの歌から、用語として身体語「手」⁵の入っている歌を選び出した。第二に、それらの歌で、「手」がどのように使われているかを分析した。第三に、啄木の『一握の砂』『悲しき玩具』の二歌集から同様に「手」の入っている短歌を選び出して、第四に、その「手」の用法を、他の歌人たちの例と比較することによって、彼の短歌表現における特徴を考えてみた。

二、「手」を使用している近代歌人たちの歌

エンゲルスに「猿が人間になるについての労働の役割」という著作があるように、人間が人間になる過程で手はきわめて重要な役割を担った。まず、人類は直立二足歩行を始めたことで、手を歩行の器官から解放し、道具を作り、操る器官にして、環境を作りかえる能力を持つに至った。手は道具を作って使用したり、手振りで仲間と情報を交換したりする。労働と他者との接触(コミュニケーション)が手の二大機能と言われている⁶。

これから「手」という用語がどう使われているかを、各歌のコンテキストとの関係から分析する。コンテキストについては、作品の時代背景や作者に関する知識、さらに文学の伝統や習慣まで含むとする広義の解釈もあるが、ここでは狭義に解し、単語に対してその前後の単語や句や文が及ぼす意味的な規定力と考えた。「手」の意味は歌の文脈に依存することでより明瞭に具体化される。文中の「手」はそれぞれに分節を構成し、分節はまた相互に主語・述語・修飾語などの論理的な関係を持つ。それらによって作られた連文節相互の間にも同様の関係が生じる。つまり、コンテキストが重層的になる場合もある。

表1 近代の代表的な歌の中の「手」

選歌集名	歌数	延べ歌数	異なり歌数	「手」の入った歌の数	「手」の入った歌の比率
『近代短歌の鑑賞と批評』(2309首) 『現代短歌』(170首) 『近代の名歌名句1000』(500首) 『鑑賞日本現代文学 現代短歌』(1398首)		4277	約3300	48	約1.45%

表1のように、参考文献1～4を調べたところ、手の入っている歌が48首ほど見つかった。以下に例を挙げる（順番は歌人の時代順）。

労働（外の世界に対する働きかけ）

- 〈1〉 霜やけの小さき手して蜜柑(みかん)むくわが子しのばゆ風の寒きに（直文）
- 〈2〉 鳴く蟬を手(た)握(ぎ)りもちてその頭(あたま)をりをり見(み)つつ童走(わら)は(は)せ来る（空穂）
- 〈3〉 その手(て)もて飯(い)食(く)ふこと(こと)の悲(かな)しさを知(し)り(に)たりけ(け)る少年(せうねん)職(しやく)工(こう)（空穂）
- 〈4〉 負(お)へる子(こ)に水(みづ)飲(の)ませむとす(と)る女(め)手(て)のわ(わ)ななく(なく)にみ(み)なこぼ(ぼ)したり（空穂）
- 〈5〉 一隊(いちたい)の兵(へい)練(れん)り込(こ)み(て)パン(ぱん)をわ(わ)か(つ)つわ(れ)も諸(しよ)手(て)（もろて）をさ(さ)し伸(の)ばし(る)る
（善麿）
- 〈6〉 左(ひだり)手(て)に母(はは)が乳(ちち)おさ(え)右(みぎ)手(て)には牡丹(ぼたん)の花(はな)をかざ(さ)してあそぶ（左千夫）
- 〈7〉 赤玉(あかたま)のつば(つば)みの牡丹(ぼたん)左(ひだり)右(みぎ)（まて）の手(て)に持(も)ち(つ)つ(つ)つ(つ)か児(こ)は(は)いね(ね)にけ(け)り
（左千夫）
- 〈8〉 大(おほ)きな(る)手(て)があら(ら)は(れ)て昼(ひる)深(こ)し上(かみ)から卵(たまご)をつか(つか)み(け)るか(か)も（白秋）
- 〈9〉 手(て)にと(と)れば桐(きりぎりす)の反(はん)射(しゃ)の薄(うす)青(あお)（あを）き新(あたら)し紙(かみ)こ(こ)そ泣(な)か(ま)ほし(け)れ（白秋）
- 〈10〉 いきどほ(ほ)る心(こゝろ)すべ(べ)なし。手(て)にす(す)ゑ(て)、蟹(かに)の(の)は(は)さ(さ)み(み)を も(も)ぎ(ぎ)は(は)な(な)ち(ち)たり（迢空）
- 〈11〉 窓(まど)から出(で)した手(て)のひ(ひ)ら——熱(あつ)っ(ぽ)い都(と)会(かい)上(じやう)層(そう)の(の)大(おほ)気(き)を感(か)じ(じ)た（夕暮）

下線部は上記したコンテクストの関係を示すものであり、このような「手を使って働く」「手で作業する」という意味の用法を、「労働」と呼ぶことにする。〈3〉の歌は手を使って飯を食うのではなく、手で働いてお金を稼ぎそれで飯を食うの意味である。「年少早くも働いて自ら生計をたてなければならぬもの(もの)の苦しみと悲しみを思いやったもので、同情とそこからヒューマンな感傷に貫かれている」⁷。〈4〉の「わななく」は緊張しすぎて手がふるえること。〈6〉と〈7〉の歌は手に牡丹を

持った赤子が母と戯れていたが、やがて寝込んでしまう様子を描いている。落合直文、伊藤左千夫、窪田空穂らの「手」の入った歌には共通性があり、家族それとも子どもたちの手を歌にしている。〈8〉はclose-upされた画面構成が奇抜であり、寓意性が感じられなくもない歌である。〈9〉は、「一公園のひととき」という連作中の一首。新聞紙を手にとってひろげると、桐の青葉が反射して薄青く見えた。〈10〉の遥空の歌は、手で蟹のはさみを切り離す。憤りの持って行き場がなく、弱いものをいじめたり殺したりするというような意味であろう。自己嫌悪を表すところには啄木の歌「東海の小島の磯の白砂に/われ泣きぬれて/蟹とたはむる」の影響と見てよかろう。〈11〉の夕暮の歌は、口語短歌の試みである。夕暮によれば「飛行機に乗るというような近代的な感情は、もう31音の定型短歌の枠の中では表出し得ない」という⁸。

以下の11首は全体として、手を使って他者と接触する行為であり、意思を伝え合っており、広い意味でのコミュニケーションである。このような「手」の用法を、「接触」と呼ぶことにする。

接触

- 〈12〉 父君よ今朝はいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり (直文)
 〈13〉 春みじかし何に不滅の命ぞとちからある乳(ち)を手にさぐらせぬ (晶子)
 〈14〉 きふをば千とせの前の世とも思ひ御手(みて)なほ肩に有りとも思ふ (晶子)
 〈15〉 細きわがうなじにあまる御手のべてささへたまへな帰る夜の神 (晶子)
 〈16〉 いつとなうわが肩の上にひとの手のかかれるがあり春の海見ゆ (牧水)
 〈17〉 夕海に鳥啼く關のかなしきにわれら手とりぬあはれまた啼く (牧水)
 〈18〉 手をとりてわれらは立てり春の日のみどりの海の無限の岸に (牧水)
 〈19〉 大きな御手無造作にわがまへにさし出されけりこの碩学(せきがく)は⁹ (茂吉)
 〈20〉 おほぢぢの荒れし手のひらをさすりつつ国にかへりし思ひすと云ひつ (赤彦)
 〈21〉 雪あれの風にかぢけたる手を入るる懐のなかに木の位牌あり (赤彦)
 〈22〉 親しからぬ父と子にして過ぎて来ぬ白き胸毛を今日は手ふれぬ (文明)

晶子には手をモチーフに書いた歌が5首見つかった。そのうちの4首が接触の意味の歌であった。上に挙げた〈13〉〈14〉〈15〉の歌は、簡単に言えば男女間の性愛を描いている。例えば、〈13〉の歌は自分の乳房を、愛する人の手にさぐらせるというのだから、肉体的な接触を大胆に表現している。〈16〉〈17〉〈18〉の牧水の3首は海岸(千葉

房総)で恋人と手を取り合った歌である。ロマンチズムと感傷性が適度に溶け合い、甘美な雰囲気醸し出している。このように、同じロマン派の歌人ではあるが、牧水は晶子と全く異なる接触感覚を示している。〈19〉の歌は、40歳の時に茂吉がようやくドイツに留学できて、大学を訪ねた際に自分を担当してくれる教授が気さくに握手を求めてきた場面を詠ったもの。〈20〉は、なくなった先妻との間に生まれ、祖父母に育てられた18歳の長男が腹膜炎になり、郷里から駆けつけた祖父の手をさすりながら、「国にかへりし思ひす」と言ったという歌。この数時間後にその長男は亡くなっている。〈21〉の歌は手を着物の懐に入れたら、長男の位牌に触れた。死んだ子供と触れていると考えることもできるので、接触の歌に入れた。文明の〈22〉は、入院してもうあまり持たないという父親の体を、拭いてあげた際の思いを詠った歌である。

コンテクスト分析によって、選出された43首の「手」入り短歌の93%にあたる39首が、「労働」と「接触」の用法となっている¹⁰。働いて作業したり他者と情報を交換したりするのが手の二大機能なのだから、「労働」と「接触」の用法が多いのは当然のことだろう。ただし、観点を少し変えてみれば、これらの傾向とはすこし違う要素の感じられるような用例も幾つか存在する。

存在

- 〈23〉 我が指の高き節見よ、世に経るは難しといはし手を出しぬ父 (空穂)
 〈24〉 手の白き労働者こそ哀しけれ。国禁の書を、涙して読めり。(善磨)
 〈25〉 幼な手に赤き銭ひとつやりたるは/すべなかりける我心かも (赤彦)
 〈26〉 むしろの上くろぐろと仏まろび居(を)り手足のもげし仏もゐるも (川田順)
 〈27〉 ゆくりなく手もておもてを掩(おほ)へればあな煩はし我が手なれども (節)
 〈28〉 両手をばズボンの隠しに入れ居たりおのが身を愛(は)し思はねどさびし¹¹
 (茂吉)

〈23〉の「指の高き節」とは、骨や筋が盛り上がってゴツゴツした「節くれだった手」のこと。ここでは農民として生きて来たことの意味でもある。節くれだった手には、父の苦難な人生が凝縮されている。〈24〉の「手の白き労働者」は、自らは手の汚れるような労働をしない知識人をさしている。当時、幸徳秋水らによって社会主義関係の書籍が翻訳された。ここでの「国禁の書」はクロボトキン『麵麴の略取』だとされ、啄木も借りて読んでいるという¹²。〈25〉は、赤彦が妻子を郷里に残し単身で上京生活を送る出発の際、送って来た子供の手にお金を持たせた。「幼な手」は子どもの手だが、ここでは子ども自体も指す。「節くれだった手」＝農民や労働

者、「白い手」＝インテリ、「幼い手」＝子ども。「～の手」という言い方がそういう手をした人自身を意味するような表現方法をメトニミー(換喩)といい、これは比喩の一種である。直文の歌「蜜柑むく小さき手」＝子ども、白秋と茂吉の歌「大きな手」＝包容力のある大人物(例 キリストや王様)などは、手によって作業や接触をしている例としたが、「手」を修飾している語との関係でみれば、これもメトニミー表現である。こうした「手」の用法を「存在」と呼ぶことにする。序章で「手」などの身体語が意味を転じて人そのものを指す例のあることは述べた。何か喩えを使って説明する場合、身近な身体語がメトニミー表現としてしばしば使われるのは当然であろう。

〈26〉の歌は解体修理中の仏像が、寄木造のために手足が取り外されて置かれている。その情景を即物的に描写した歌であるのだが、生ではないにしろ、手足が放置されていることへ何らかのこだわりがあった。〈27〉の長塚節の歌は、結核にかかったため婚約の解消を申し出た後も、その元婚約者と交際を続けていたのを、彼女の兄から厳しく咎められ、その苦悩などにより不眠に陥ったところで詠んだもの。「ゆくりなく」は「その気もないのに」、手がふと顔をおおったのだが、その自分の手すら煩わしくてならない。意識を集中した思いの深さが、手を異物と感じ嫌悪してしまったのだろうか。コンテクストとしては労働になろうが、手を異物的な(機能としての手ではない)存在にとらえている。茂吉の〈28〉の歌は、精神病院で担当していた患者が自殺してしまい、彼を火葬している場面を詠ったもの。自分を自己愛の強い人間とは思わないが、心の奥で生きていることの孤独を感じて憐れんでしまうというのは、十分に理解できる。問題はこうした心情を述べた下句に対し、どうして「両手(もろて)をばズボンの隠しに入れ居たり」という上句を対置したかである。こうした点に茂吉らしい詩的感性が潜在している。何の意図もなく無造作にポケットに入れられている両手、おそらくそれは茫然自失にある作者の心境を象徴しているのだろう。〈26〉〈27〉〈28〉の歌における「手」は、他の例のような人の全体を現すメトニミー表現もしくは物の一部で物を象徴する表現ではないが、これらも存在に含めて考えたい。むしろ本論ではこのような「手」に注目したいのである。

以上のように、コンテクスト分析によって、選び出された44首の短歌を分類し表2にまとめた。

表2 代表歌人の代表歌の中の「手」

歌人名	手の入った歌 歌数	内訳		
		労働	接触	存在
落合 直文	2	1	1	
与謝野鉄幹	2	1	1	
与謝野晶子	5	1	4	
窪田 空穂	7	5	1	1
長塚 節	2	1		1
若山 牧水	4	1	3	
土岐 善麿	2	1		1
伊藤左千夫	3	3		
斉藤 茂吉	2		1	1
北原 白秋	3	3		
島木 赤彦	5	1	3	1
前田 夕暮	1	1		
釈 道 空	2	1	1	
木下 利玄	1		1	
川田 順	1			1
土屋 文明	2		2	
合計	44	20	19	5

三、啄木の歌語として「手」を使用している歌

啄木の「手」の入った歌に関しても、例えば以下のような例が見られる¹³。

労働

- (1) 平手（ひらて）もて／吹雪にぬれし顔を拭く／友共産を主義とせりけり
（『一握の砂』）
- (2) 空色の罎（びん）より／山羊の乳をつぐ／手のふるひなどいとしかりけり
（ " ）
- (3) 廻診の医者の遅さよ！／痛みある胸に手をおきて／かたく眼をとづ。
（『悲しき玩具』）
- (4) たへがたき渴き覚ゆれど、／手をのべて／林檎とるだにものうき日かな。

(")

接触

- (5) やとばかり／桂首相に手とられし夢みて覚めぬ／秋の夜の二時
(『一握の砂』)
- (6) よりそひて／深夜の雪の中に立つ／女の右手 (めて) のあたたかさかな
(")
- (7) 底知れぬ謎に対ひてあるごとし／死児 (しじ) のひたひに／またも手をやる
(")
- (8) 脈をとる看護婦の手の、／あたたかき日あり、／つめたく堅き日もあり。
(『悲しき玩具』)

これらの短歌は他の歌人たちならば、あまり詠わないような日常の瑣事までも題材にしているという点は啄木らしいが、「手」の用法自体は他の歌人たちと変わりはない。(1)の歌の背後には北海道の厳しい風土が存在している。この手は「白い手」と対照的になっている。(2)も北海道の居酒屋でまだ稚い娘がこぼしてはと緊張している様子。(3)の歌は、医者 of 回診を待っている間に、痛む胸に自分の手を当てている。胸に手を触れたのならば、接触でもよいと考えられなくもないが、何かを伝えるために触れたのではなく、痛をやわらげたくて手を当てたのだから、労働と考えた。(4)の手を動かすのも面倒なのは、生命力自体の衰えから。(5)の桂首相というのは、大逆事件の際の首相であり、彼に手をとられたというのは、接触どころか逮捕された夢を見たということなのだろうか。(6)は北海道で出会った芸者小奴を詠ったもの、「暖かい手」＝「愛人」などというのはメタファーを含みつつもメトニミー的であろう。(7)は、生まれてわずか24日で死んだ長男真一を詠ったもの、子供はもう死んでいるのだから、治療行為ではなくて接触。(8)の「脈をとる看護婦の手の～」は連文節、「脈をとる」と「手」は修飾語と被修飾語の関係(接触)、手の述語は「あたたかき」「つめたく堅き」であり、二重構造になっている。「暖かい手」「冷たい手」＝若い女性というのもメトニミー的でもある。

問題は、下にあるように「存在」に分類する歌が、啄木の場合多く詠まれていることである。

存在

- (1) 手も足も／室いっぱいに投げ出して／やがて静かに起きへるかな (『一握の砂』)
- (2) 手が白く／且つ大なりき／非凡なる人といはるる男に会ひしに (")

- (3) はたらけど／はたらけど猶（なほ）わが生活楽にならざり／ぢつと手を見る（ " ）
- (4) 泣くがごと首ふるはせて／手の相を見せよといひし／易者もありき（ " ）
- (5) 手套を脱ぐ手ふと休む／何やらむ／ころかすめし思ひ出のあり（ " ）
- (6) つくづくと手をながめつつ／おもひ出でぬ／キスが上手の女なりしが（ " ）
- (7) 真白なるラムプの笠（かさ）に／手をあてて／寒き夜にする物思ひかな（ " ）
- (8) 手も足もはなればなれにあるごとき／ものうき寝覚め！／かなしき寝覚め！
（『悲しき玩具』）
- (9) よごれたる手を見る——／ちやうど／この頃の自分の心に対ふごとし。（ " ）
- (10) 笑ふにも笑はれざりき——／長いこと捜したナイフの／手の中にありしに。（ " ）
- (11) 寝つつ読む本の重さに／つかれたる手を休めては、物を思へり。（ " ）
- (12) いつとなく、記憶に残りぬ——Fといふ看護婦の手の／つめたさなども。（ " ）
- (13) 堅く握るだけの力も無くなりし／やせし我が手の／いとほしさかな。（ " ）

表3 啄木の歌の中の「手」

歌集名	歌数	総歌数	手の入った歌の数	手の入った歌の比率	手の入った歌の内訳		
					労働	接触	存在
一握の砂	551	21	3.81%	5	9	7	
悲しき玩具	194	16	8.24%	7	3	6	
合計	745	37	4.96%	12	12	13	

川田の仏像修理の歌では現実に仏像の手は取り外されていたが、(1)(8)(10)(13)の歌では、疲れて放心状態であったり、意識が散漫であったり、病気で衰弱してしまったりして、手が自分のものとは思えないような状態——意識と身体のズレを詠っている。これらはその気もないのに手が顔をおおった長塚節の〈27〉や茂吉の両手をポケットに入れている〈28〉の歌に近いのではないか。(2)「手が白く／且つ大なりき」は知識人で大人物のメトニミー、何人かのモデルが考えられているが、その一人に詩人兼彫刻家高村光太郎がいる¹⁴。(9)「汚れた手」は実際に汚れていたのだろ

うが、それを心の汚れ、打ちひしがれてデカダンな自分とも解釈できる。つまり、「汚れた手」は墮落している自分のメトニミー。(12)「冷たい手」=女性ないし看護婦。(4)「手相」は手から人の運勢までも判断しようとする。以上の4首は傾向としてみれば、手が人物そのものの比喩となっている点でメトニミー的である。

冒頭で引いた(3)「はたらけど」の歌は啄木の手に対する認識を象徴的に表した歌。自分の心が自分の手と会話ないし向かい合っている。(6)の歌でもそうだが、彼は何かというと手を意識してしまうらしい。さらにそれが、(5)(7)(11)の歌では手の動きが止った瞬間を意識すると、そのことが心の中での物思いを顕在化させることへ続く。(5)の歌はそうした啄木の短歌が成立する過程そのものをそのまま歌にしたものである。

結論を考える前提として、これまで行って来た作業を整理しておきたい。啄木と彼を除いた他の歌人たちの歌から、「手」という歌語が使われている歌をそれぞれ見つけ出し、さらにそれらをコンテクストの違いによって、「労働」「接触」「存在」の三種類に分類した。そして労働と接触とが手という器官の二大機能なのだから、その機能に関連する用法が見られるのは当然と考えた。その上で、「存在」に分類した用法の中でも、メトニミー的な表現は、身体語の特質として不思議なことではないとした¹⁵。最後に残ったのは存在に分類されながらも、メトニミー的でない用法であり、そのような例は、啄木を除く歌人たちの歌では、〈26〉の川田順の歌と〈27〉の長塚節、〈28〉斎藤茂吉の歌のわずかに3首に過ぎなかった。啄木の方は存在の13首からメトニミー的な4首を除いた、9首がそれに該当する。この9首の中に啄木短歌の特異性を解明するカギがないかが考察すべき問題として残った。

四、啄木の短歌とは何か

佐々木幸綱は近代短歌の特色を、病気の歌や貧乏の歌、家族の歌といった極めて私的な素材を詠ったことにあるとした上で、次のように述べている¹⁶。

病気、貧乏、家族の歌というとすぐ思い出されるのは石川啄木の短歌である。啄木は、「短歌大衆化時代」の申し子のようなかたちで登場した新しい価値観を持った歌人であって、彼の才能は、近・現代短歌の中核的テーマが何かを早くも見抜いていたようである。「短歌革新運動」の実体は何だったかを直感的に、正確につかんだ歌人として石川啄木を評価する、そんな視点をもっと検討されてよいのではないだろうか。

本論では歌語として使われた「手」の用法を分析するため、「労働」「接触」「存在」の三視点を設定して考察した。この三カテゴリーが佐々木のいう近代短歌の三特徴とどう関連するのだろうか。労働は貧乏に重なり、家族の問題は人間関係であり、そのまま接触と重ねてもよいだろう。

概念的には病気と存在は重ねて考えられる。実際に啄木は肺結核にかかり、入院もしたし、自宅での療養生活も送り、27歳の若さで人生を終わらざるをえなかった。『悲しき玩具』にはそれらを題材にした歌もかなり入っている。しかし、啄木の短歌にとって病気が決定的に意味を持ったかどうかは疑問である。近代短歌の中に「療養短歌」という分野が考えられるほど、結核やハンセン病と短歌には深い関係があった。それらは治癒の難しい病気であり、長い期間の治療を必要とした。療養短歌を代表するといってよい、正岡子規と長塚節の歌を以下に引用しておく。

いちはつの花咲きいでてわが目には今年ばかりの春行かんとす 子規
いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ
白銀(しろがね)の鍼打つごととききりぎりす幾夜はへなば涼しかるらむ 節
鶏頭は冷たき秋の日にはえていよいよ赤く冴えにけるかも

子規は結核性の脊髄カリエスであり、七年間に及ぶ壮絶な闘病生活の末に、36歳で亡くなった。長塚節については〈27〉の歌で触れたが、咽頭結核であり、三年半の闘病生活の後、37歳で没している。啄木が療養生活を送ったのは最後の一年ほどであり、27歳でなくなった。療養生活は子規の場合に顕著であったように、現実には身体的に不自由な例もあるし、長塚節が婚約者と別れざるを得なかったように、周囲の人間から隔離される場合もあった。そして療養短歌のもっとも本質的な問題は、治療の不可能さゆえに、最後は死に向かうという点である。死を受容せざるをえないことが、どれほど感覚を研ぎ澄まし、緊迫感のある短歌を作らせたかは引用した子規や節の歌から理解できよう。啄木の「人間のその最大のかなしみが／これかと／ふつと目をばつぶれる」という歌は東大病院で病気が「慢性腹膜炎」と診断された際に詠ったものだが、病気が啄木の短歌に子規や節たちほどに、死への認識を深化させたとは思えない。彼は闘病生活も短かったし、若いまま死んでしまったのである。

中野重治¹⁷⁾は詩人としての啄木は感傷的でおおむね弱々しく、反面、思想的には積極的かつ強靱であったとする。そのプラス面を摂取し、マイナス面を批判すればよいとした。こうした啄木論を正面から批判したのは、国崎望久太郎の『啄木論序説』である。彼は中野が啄木の弱い部分として批判した短歌を取り上げて、啄木文

学の主体的条件は社会主義思想に装われた主体などではなく、「生活上の落伍者」¹⁸であるのだが、その主体性のひ弱さこそが啄木文学を支えているとした。さらに「自己を社会主義者と規定することによって完全に満たさなかった啄木の自我が、無意識のうちに発見した実存主義的視野の存在を当然予想させるものがある。そしてこの側面は従来の啄木研究にとって全く不問に付されていた」¹⁹と指摘している。思想が革新的だったからといって、そのままその人間も文学も評価されるべきものではない。常識的な視点から見れば、啄木は生活者としては破滅的、自己中心的でありすぎた。逆説的にいえば、彼の文学はそのようなマイナスとされた要因にこそ依拠して成立した。ただ、本論で論じた歌の表現として「手」を使うことに見られるような啄木歌の特異性をどう理解したらよいか、参考となる論はほとんどなかった。

啄木が「手」入りの歌を作ったのは、単純化していえば、手が気になってならなかったというか、何かにつけ手を意識してしまったためである。しかし、身体部位で手ほどいつも視界に入っている器官は他にない。だから気にし始めたら切りがないものだから、冒頭で引用したように、手に関する既成の観念は、付属的で主体ではない器官、視界にあったとしても、それは自己存在そのものではないとされる。にもかかわらず、啄木は手を意識せざるをえなかった。どこまで意識化されていたかは別にして、彼にとっての可能性として手は己の管理を離れた自立的な存在だったと考えるみたらどうであろうか。

啄木短歌に自己存在の実存的な心情を表現する可能性があったとすれば、それは確かに佐々木のいうように「近・現代短歌の中核的テーマ」というよりも、「近・現代文学の中核的テーマ」に他ならない。文学ということになると、啄木の死んだ四年後に、芥川龍之介が「鼻」という小説を書いた。「今昔物語」に出てくる鼻の長い高僧を題材にして近代人の過剰な自意識を描いたといわれる。啄木において「手」がそうであったように、芥川における「鼻」もどうやら心の制御下から逸脱を始めていた²⁰。

(この論文の要旨は中国陝西師範大学の主催による『中日韓：言語・文化国際シンポジウム』で口頭発表)

注

- 1 今井泰子・上田博編『鑑賞日本現代文学6 石川啄木』角川書店、1982
- 2 秦恒平『からだ言葉の本』筑摩書房、1984

- 3 香原志勢『人体に秘められた動物』NHK出版、1981
- 4 短歌は文語で書かれているため理解が難しい。誤読を避ける目的から基本的な解釈・鑑賞の付いているアンソロジーを基礎資料に選んだ。
- 5 歌を選び出す際に身体部位を示す実質を残す「手」の用例のみに限定して選んだ。
- 6 香原志勢『人体に秘められた動物』NHK出版、1981；立川昭二『からだの文化誌』文芸春秋、1995など。
- 7 木俣修『近代短歌の鑑賞と批評』明治書院、1964、p.494
- 8 木俣修前掲書、p.486
- 9 小倉真理子『コレクション日本歌人18 齊藤茂吉』笠間書店、2011、p.56
- 10 参考として、本文の例に引用しなかったその他の歌を挙げておく。

労働

作者なるMAUPASSANTの発狂に思ひいたりて手の本を閉づ (鉄幹)
 おどけたる一寸法師舞ひ出でよ秋の夕のてのひらの上 (晶子)
 手枕の我れに寄り来て幼きが頭(つむり)や病むとませて問ふかも (空穂)
 小さきの手の手力つくしまはず独楽今はまはれよこの子の為に (空穂)
 手を当てて鐘はたふとき冷たさに爪叩き(つまたた)聴くそのかそけきを (長塚節)
 手さぐれど手には取られず、眼開けば消えて影無し、さびしあな寂し (牧水)
 病める児が手疲れけむわが持てる牡丹の花を母に持たしむ (左千夫)
 童女像朱の輝(て)り霧(き)らひ今朝見れば手に持つ葡萄その房見えず (白秋)
 椿赤し島の童女(どうじょ)が掌(て)の上に卵を伸せて売る面わはも (赤彦)

接触

化人(けにん)きて黒き衣をうちかづき我が手を引きぬ目も口もなし (鉄幹)
 手をわれに任せて死にぬ旧人を忘れざりしは三十とせの前 (晶子)
 熱(ねつ)いでし額(ぬか)に手ふれつこの宵の暗きに動く夏の風とゐる (空穂)
 日の暮れまでおほぢぢの手をとりてよろこびたはやすきかもわが子の命 (赤彦)
 白く肥えて大き手を さし出したり。握手求むる みづべしき手 (迢空)
 遠足の小学生有頂天(うちょうてん)に大手ふりへ往来とほる (利玄)
 川をへだて向菜摘(むかふなつみ)は夕月てり手を上げし子供何かいふらし (文明)

- 11 齊藤茂吉『赤光』岩波文庫、1999
- 12 木俣修前掲書、p.524。啄木にも「赤紙の表紙手擦れし/国禁の/書(ふみ)を行李の底にさがす日」などという歌がある。
- 13 啄木の手入り歌で参考として、例に引用しなかった歌を挙げておく。

労働

手のために雪の融くるが／こちよく／わが寝飽きたる心には沁む (一握の砂』)

あさ風が電車のなかに吹きいれし／柳のひと葉／手にとりて見る (")
 死にし児の／胸に注射の針を刺す／医者の手もとにあつまる心 (")
 何となく、／今朝は少しく、わが心明るきごとし。／手の爪を切る (『悲しき玩具』)
 真夜中の出窓に出でて、／欄干の霜に／手先を冷やしけるかな。 (")
 よごれたる手を洗ひし時の／かすかなる満足が／今日の満足なりき。 (")
 手を打ちて／眠気の返事きくまでの／そのもどかしさに似たるもどかしさ！
 (")
 ひさぶりに、／ひと声を出して笑ひてみぬ——／蠅（はひ）の両手を揉むが可笑しさに。
 (")

接触

おどけたる手つきをかしと／我のみはいつも笑ひき／博学の師を (『一握の砂』)
 興来れば／友なみだ垂れ手を揮りて／酔漢のごとくなりて語りき (")
 ゆきて手をとれば／泣きてしづまりき／酔ひて荒れしそのかみの友 (")
 風流男は今も昔も／泡雪の／玉手さし捲く夜にし老ゆらし (")
 敵として憎みし友と／やや長く手をば握りき／わかれといふに (")
 ひさしぶりに公園に来て／友に会ひ／堅く手握り口疾（くちど）に語る (")
 脈をとる手のふるひこそ／かなしけれ——／医者に叱られし若き看護婦！
 (『悲しき玩具』)

いつとなく我にあゆみ寄り、／手を握り、／またいつとなく去りゆく人々！ (")

- 14 高村光太郎に「手」という題の詩が『道程』（1914）にある。

手

わが手を見ればうとまし
 昨日病院の白き部屋に見たる
 かの瓶詰の手と
 さまで変らずなまなましきものを
 手のみかは…

- 15 文学表現においてはメタファー（隠喩）がロマンティズムやシンボリズムの表現で、メトニミーはリアリズム表現で顕著に使われる。詩歌に用いられる比喩は、直喩、隠喩、音喩（オノマトペ）など。だが、近代短歌、とくにアララギ派の歌人たちは比喩を嫌った。写生の理念に反すると考えたかららしい。身体を媒介にしてすべての行動や思考がなされるため、手だけでなく身体語は、とにかくメトニミー表現になりやすい。さらにまた、啄木の短歌では手だけでなく、目や顔、口や胸、足や首など、様々な身体語が歌語として使われている点も注目されてよい問題であろう。

- 16 佐々木幸綱編『鑑賞日本現代文学32 現代短歌』角川書店、1983、p.24
- 17 中野重治「啄木と『近代』」『短歌俳句研究』1948、9
- 18 国崎望久太郎『啄木論序説』法律文化社、1960、p.11
- 19 国崎望久太郎前掲書、p.20
- 20 養老孟司『身体の文学史』新潮社、1997

参考文献

- 1 木俣修『近代短歌の鑑賞と批評』明治書院、1964
- 2 木林勝夫『現代短歌』学燈社、1965
- 3 『国文学 鑑賞・近代の名歌名句1000』学燈社、1978.9
- 4 佐々木幸綱編『鑑賞日本現代文学32 現代短歌』角川書店、1983
- 5 金田一京助編『一握の砂・悲しき玩具』新潮社、1952
- 6 岩城之徳『石川啄木』学燈社、1970
- 7 『日本近代文学大系23石川啄木』（解説・岩城之徳 註釈・今井泰子）角川書店、1969
- 8 岩城之徳『啄木歌集全歌評釈』筑摩書房、1985